

2026年 いざ世界遺産登録へ！

「飛鳥・藤原の宮都」の構成資産を紹介します

●飛鳥寺跡（あすかでらあと）

日本で最初に建てられた本格的な仏教寺院です。また、日本で初めて瓦屋根が用いられ、建物を支えるために礎石が使用されました。発掘ではこのことを証明する瓦が大量に出土しました。本尊は、「^{くらつくりの}鞍作止利」が造ったとされる約4.8mの飛鳥大仏です。

一塔三金堂式の伽藍配置は、高句麗や百済の影響を強く受けており、さらに地下の塔心礎に舍利容器を納める方法は、百済でも行われていたことが判明しています。一方、埋納物の中には日本の古墳時代の副葬品と共通するものも多く、日本と東アジアの文化や技術を融合させていたことが分かります。



▲釈迦如来坐像（飛鳥大仏）



▲創建当初の伽藍配置イメージ
(提供：株式会社アスカラボ)



▲塔の中心柱の基部から出土した埋納物
(提供：奈良文化財研究所)



▲境内から出土した日本最古の瓦
(提供：奈良文化財研究所)

●橘寺跡（たちばなでらあと）

『日本書紀』などの記述により、創建当初は尼寺であったことが分かります。日本で最古級の尼寺と言われています。また、聖徳太子誕生の地と伝えられています。

百済の影響を受けた伽藍配置や、日本最古級と考えられている、唐の影響を受けた“^{せんぶつ}塼仏”（型に粘土を押し付けて成型するタイル状の仏像）が境内から大量に出土しており、東アジアの文化や技術の影響を強く受けています。川原寺と対で存在した橘寺は、飛鳥宮を強く意識して東を正面とする伽藍配置となっていることから、仏教が都づくりに大きな影響を及ぼしていたことが分かります。



▲創建当初の伽藍配置イメージ
(提供：奈良文化財研究所)



▲方形三尊塼仏断片
(伝奈良県橘寺出土品)
(提供：奈良国立博物館)



▲方形阿弥陀三尊塼仏
(中国出土)
(提供：奈良国立博物館)